

～児童・生徒と地域の大人の対話会～

県民あげて取り組んでいる“いじめ・非行をなくそう”やまがた県民運動においては、学校、家庭及び地域が連携して、「いじめ・非行を許さない」環境づくりを進めることとしています。また、その一環として、児童生徒がいじめの防止・根絶や、自分たちの生活を整えることについて、地域の大人とともに主体的に考え、また具体的に取り組む契機とするため「児童・生徒と地域の大人の対話会」を実施しています。今回は上山市で開催された様子を紹介します。

SNZの上でのトラブルについて考える ふれあいトークかみのやま

12月10日（水）上山警察署で、上



山地区少年補導連絡会（会長鈴木萬四郎氏）と上山警察署が「ふれあいトークかみのやま2021」を開催しました。対話会には、上山明新館高校や市内中学校、上山高等養護学校の生徒31名と教職員7名、また、青少年育成市民会議など、健全育成に関わる団体23人の計61名が参加し、のつのグループに分かれてグループ討議を行いました。討議では、メッセージの返信が遅れただけで、友達から冷たい態度をとられた事例を見ながら、感想や意見を交換しました。

あるグループの内容を紹介します。

「我々の場合、電話やメッセージをすぐ返せない状況の方が多い。すぐに返さないから」と言って、関係性が変わるのはではない。また、予定がはつきりしてないなら、返事もできない。そう考えると、返信が遅れたとしても、冷たい態度をとるのはどうかと思う。」（大人）

「予定を確認しないと一緒に遊べるかどうかわからぬ」としても、「そのことをまずは返しておぐべきだった。発信した人に对不起儀だと思つ。」（中学生）「のよつて、世代間で大きな違ひがある」とおもつたぬて認識でももつた。

それを受けて討議Ⅱでは、「のよつの作法・のよつと新しい人間社会」という視点で、今後に向けての課題と思われる内容を話し合いました。

まとめとして発表された内容は、「発信している内容は誰かに見られてしまうと危機感を持つ」と「相手の顔が見えないから怖い」ということを認識する必要がある「誤解を防げないような表現方法」「お互いに理解する」「わかりやすい」「丁寧な言葉遣いをする」等の意見が出ました。のよつを想起するのではなく、そのよつを活かすような使い方が重要です。

上山明新館高校の平田校長は講評で、「幅広い年代が集まって話をすると、とても貴重。様々な見方、考え方があるので、多様な意見の中から協働で意見を作つていく、その過程が大事だと思ふ。今日、のよつで得た情報をそれぞれ持ち帰つて、日頃の生活に活かして欲しい」と述べていました。

最後に参加してみての感想を聞いて

みました。「違う世代の人の考えを知る

こと、世代の違いが意見の違いに大きく影響してくることがわかって、とても楽しかった」（中学生）、「年代が違えば育つってきた環境も違うのだから、考えるこ

とも違う。私たちが当たり前と思っていたことが当たり前でないことがわかつて、

参加してよかつたと思つ。」（高校生）と

